

立志の道



2019. 11. 19 NO.18

発行責任者 校長 小池雅美

甲陵中・高への通学者が近道として利用する立志の道。
校訓「立志躬行」の実現への道のりを、中学校の教育活動の様子を通して、随時お伝えしていきます。

オーストラリアの旅。それぞれの心に残ったものは？

11月10日～15日の6日間にわたり実施された「オーストラリア語学研修」が終わり、3年生は通常の学校生活に戻りました。夢のような6日間だったのではないのでしょうか。毎日良いお天気に恵まれ（ずいぶん暑い日もあったようですね）、シドニーの名所やブルーマウンテンズなどの観光地では、その場所ならではの美しい景色も堪能できたと思います。さらに今回の旅で大切だったのは、ホームステイや学校訪問等での「人とのふれあい」だったと思います。人によって受け取り方は違うでしょうが、中学生の皆さんにとって「素晴らしい貴重な経験」であったことは間違いのないと思います。中学生でこのような経験ができたことを感謝する気持ちが持てるといいと心から思います。今後、振り返りの学習もあると思いますが、自分が学んだことを整理していくと、この研修旅行の意義はもっとはっきりしてくるのではないのでしょうか。

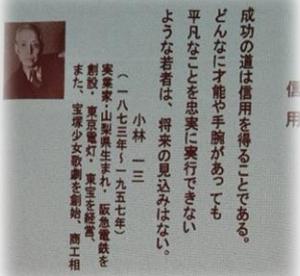
保護者の皆さま、いろいろとご心配はあったことと思いますが、無事にこの研修旅行が終えられたことは、ご家族の支えがあってからこそ、と思います。本当にありがとうございました。これからもよろしく願いいたします。



ノーベル賞の大村智先生からのメッセージとは……

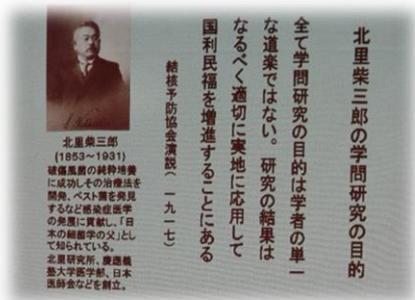


3年生語学研修中の11月12日、ノーベル医学生理学賞を受賞された蕪崎市出身の大村智先生（北里大特別荣誉教授）が、本校ミューズホールで「未来をひらく若者たちへ」と題して、講演をして下さいました。甲陵高全生徒と、甲陵中と長坂中の1、2年生が参加しました。先生はスポーツに打ち込んだ高校や大学時代のこと、定時制高校の先生から研究者を目指した自らの経歴や、オンコセルカ症という病気の特効薬「イベルメクチン」の研究の過程などをわかりやすくお話しして下さいました。また、ノーベル賞に至るまでの先生の考え方は、先生自身が学んだ多くの先人の言葉や教えに基づいていることも、具体的に紹介していただきました。



こちらは、大村先生と同じ蕪崎市出身の実業家小林一三の言葉です。「才能があっても平凡なことを忠実に実行できない若者は、見込みがない。人から信用を得ることが成功の道である」大村先生は、人との縁を大切にし、その地道な研究の姿勢から、多くの人に信用される研究者になりえたのだと思います。

こちらは、伝染病の研究で世界的に有名な北里柴三郎の言葉です。



「研究の目的は、学者の道楽ではなく、研究の成果を応用して国の利益や人々の幸せを増進することだ」大村先生の微生物の研究は、決して自分の興味本位のものではなく、結果的に発展途上国の多くの人々を失明から救い、発見した多くの化合物は、現在様々な薬として応用されているそうです。

このほかにも多くの言葉を紹介して下さいましたが、先生は今の中高生に「ひとつの学問にとどまらず、広い分野を学んで欲しい」「人がやらない新しいことにまず挑戦する、失敗しても自分の糧になる」など、心強いメッセージを残して下さいました。生徒の皆さんも思うところがあったのではないのでしょうか。大村先生、本当にありがとうございました。



1年生は ESD 研修 2年生は SSH 研修に出かけました



11月14日、1年生は、東京にある「日本科学未来館」に出かけました。この研修は、環境省の取組であるESD（持続可能な開発のための教育）プログラムを通し、エネルギー問題や資源の有効活用について学ぶことを目標にしています。1年生は事前学習を行った上でこの日を迎え、科学未来館ではいろいろなエリアで多くの体験をしてきました。今後の学習に役立つ楽しい研修になりました。



同じ日、2年生はSSH研修として、「山梨県リニア見学センター」「山梨県立科学館」「サントリー天然水白州工場」を訪れました。これから取り組むSSHに関わる課題設定のヒントになる学習の機会となりました。ぜひ高校につながる研究テーマを見つけて欲しいものです